

「源氏物語」 梅枝巻に関する一考察

—「かな（女手）」書の手紙（消息・ふみ）と調度手本について—

吉田 紀恵子
日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study on the “Umegae” Chapter of *The Tale of Genji*

—Mainly on the Kana Calligraphy—

YOSHIDA Kieko
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Murasaki Shikibu (Lady Murasaki) wrote *The Tale of Genji* during the *Heian* period. She discussed the theory of *kana* calligraphy in the *Umegae* chapter of *The Tale of Genji*. *Kana* is a Japanese alphabet. It was customary for young noble-women of the *Heian* period to master *kana* writing. It is highly probable that they had read the *Umegae* in order to learn the theory of *kana* calligraphy and to practice *kana* writing.

はじめに

『源氏物語』「梅枝」巻において、紫式部は平安時代の貴族階級の女性の教養に不可欠な「かな（女手）」についての書論を述べている。その為、「梅枝」巻を、当時の貴族階級の女性達は「かな（女手）」の教養書として享受したといわれる。そして、「梅枝」巻は現代の我々に、平安貴族階級の教養について伝えてくれる貴重な物語でもある。貴族階級の教養の目的を、「梅枝」巻で物語られている「かな（女手）」書の手紙（消息・ふみ）と調度手本から考察する。

1. 「かな（女手）」について

『源氏物語』は、平安時代の中頃、十一世紀初頭に紫式部という女性によって、「かな（女手）」即ち女性が書記及び読解できる文字を用い、女性の為に書かれた物語である。「かな（女手）」は十世紀初頭には完成し、日本語文の書記を可能としていたと言われる。この日本独自の表音文字「かな（女手）」は、現在の平仮名を含む「変体かな」である。『源氏物語』は、「かな（女手）」という表音文字があってこそその成立といっても過言ではない。

古代の日本人は、口頭言語のみで文字を持っていなかったといわれる。八世紀前期成立の史書『古事

記』及び『日本書紀』では、五世紀に朝鮮半島経由で漢字漢文が齎されている。日本人は漢字漢文を学び中国文化を受容するに止まらず、それを消化し日本独自の文化を創りあげた。そして、日本語文を書記する為に、表語文字である漢字を一字一音の表音文字として使用した。いわゆる万葉仮名である。しかし、主として画数の多い楷書体および行書体の漢字を用い、一字一音のみならず多様な表音文字に発展した万葉仮名は日本語書記に適しているとは言えず、書きづらく、また読み難いものであった。

八世紀末から九世紀末にかけ、日本人は日本語書記に適した利便性のある表音文字を求め、律令制のもと、漢字に精通した男性達が草書体の漢字を用いた万葉仮名を書き崩して草仮名とし、更に書き崩して仮名を創り、それを漢字の素養のない女性達が大胆に書き崩し、女でも使用できる手（文字）即ち日本独自の表音文字「かな（女手）」を創ったという。

「かな（女手）」は、十世紀初頭には、日本語文の書記が可能となるまでに完成し、流布していたのではないかと思われる。それを窺わせるのは、延喜五年（905）成立といわれる最初の勅撰和歌集『古今和歌集』である。『古今和歌集』は「かな（女手）」で表記された最初の和歌集である。原本は存在しない

という。しかし、伝存する写本が「かな（女手）」で書記されていること、そして、『古今和歌集』の和歌が「かな（女手）」という清音・濁音の区別がない一字一音の「かな（女手）」を用いることにより、掛詞および縁語等のレトリック、隠し題という表現方法を可能とし、和歌の表現・技法を拓けていること等が、『古今和歌集』の原本が「かな（女手）」による書記であることを示唆している。『古今和歌集』も、また、「かな（女手）」という表音文字があってこそ成立の成立といっても過言ではないのである。

十世紀に、和歌を「かな（女手）」で書記した最古の古筆といわれ、伝承筆者を『古今和歌集』撰者・紀貫之とし、貫之自身が自撰家集を書記したと伝えられる「傳紀貫之筆 自家集切」¹が伝存する。その合計九首の和歌には四十八音時代の仮名遣が見られる為、久曾神昇は「用例が極めて少ないので断定はできないが、円融天皇時代（969～984）以前として大過なからう。」²と推定し、「延喜十五年春」と記された詞書をもつ和歌があることから、延喜十五年（915）春以降、円融天皇時代以前の成立とする。すなわち、『古今和歌集』成立に近い時期の「かな（女手）」による和歌書記である。『古今和歌集』は、「傳紀貫之筆 自家集切」に見られるような「かな（女手）」で書記されたのであろうか。

「傳紀貫之筆 自家集切」の影印に見られる「かな（女手）」の字体は草仮名よりも簡略化され、利便性のある実用的な字体となっており、「かな（女手）」の最も古い形態を示すものといわれる。線質は漢字を書き慣れたと思われる確かなものである。もとは、縦・九寸（27.27 cm）の卷子本の形態で、料紙は質素な楮紙（こうぞかみ）の素紙、和歌は三行書きの書式で書記されている。そして、母体である草仮名の姿を色濃く残す「かな（女手）」を一字ずつ丁寧に書いた上で二字から五字程度を連綿し、行頭に置かれた第一句冒頭の多くは墨継がなされている。実用的な文字としては完成しているが、「かな（女手）」の美を表現するに至らない段階の書といえよう。

「傳紀貫之筆 自家集切」以降、十一世紀中頃迄の「かな（女手）」書は、ごく僅かな手紙（消息・ふみ）しか伝存せず、伝存するのは十一世紀中頃以降の古筆である。なお、古筆とは、古人の筆跡のうち優れた書をいうが、この論文では、主として平安時代から鎌倉時代に書かれた詩歌集の名筆を指す。そして、伝存する古筆の多くは和歌と書の手本として作られた調度手本である。調度手本とは、天皇や皇族及び貴族達の注文による特別誂えの華麗な料紙に能書家が書写し、美しく装丁された和歌の教科書および書道の手本であり、平安時代の貴族社会文化の粋を凝らした優美な室内調度品である。

「かな（女手）」のルーツは草書体の漢字を用いた万葉仮名である。草書体の漢字は、原則的に一字一筆で書かれ、それが数文字ずつ連綿する、すなわち連続して書くことが可能な書体である。この連綿体（各文字が次々に連続して書かれている書体）を受け継いだ「かな（女手）」を用い、十世紀末から十一世紀前期に書された「仮名消息」が紙背文書として、わずかではあるが伝存する。これは、伝存しないと言われる十一世紀中期以前の調度手本の「かな（女手）」の姿を推し量る資料ともいえる。

最も古いとされるのは、「石山寺蔵虚空菩薩念誦次第紙背文書」の「仮名消息」である。「石山寺蔵虚空菩薩念誦次第」の紙背には「数片の仮名消息及び書状が、康保三年（966）の年記を有する文書と一連となっている」³という。これは、和様書道の基礎を築いた小野道風（894～966）が没した頃である。紙背の「仮名消息」は七片あり、書風は二種類ある。影印で見ても第一種は「多少獨草的な古雅掬すべき作例である。」⁴、第二種は「第一種に比すると、さらに進歩したもので、すでに連綿体となって典麗である。」⁵、そして、第二種の中の文書第五については、

天地をそろえた書式で、これは『源氏物語末摘花』に野暮ったいとけなされた形式で、一中略一文書第三は『返し書き』があり、『散らし書き』の

¹ 平安書道研究会編『日本名筆全集 第三期 二巻』、書藝文化院、1960年、図版

² 久曾神昇著『仮名古筆の内容的研究』、ひたく書房、1980年、p.44

³ 平安書道研究会編『日本名筆全集 第十六巻』、書藝文化院、1957年（?）、p.28

⁴ 同上、p.31

⁵ 同上、p.31

初歩のようなものがでている。この方向が進行すると北山抄紙背の『散らし書き』となってゆくものであろうから、消息書式変遷の年次的裏付けの資料ということにもなる。⁶

と、田村悦子は述べている。

次は、藤原公任（966～1041）が撰述し、公任の自筆稿本と確定され、唯一の真跡遺品である京都国立博物館蔵『北山抄卷十』の紙背文書「北山抄紙背仮名消息」二通⁷である。いずれも年月日は記されていないが、用紙が別当宣（検非違使の別当の命を検非違使庁の官人が奉じて発給した文書）および消息等を継いだものである。その為、「北山抄紙背仮名消息」は藤原公任（966～1041）が左衛門弼督検非違使別当在職中（996～1004）に貰った消息とされる。表の『北山抄卷十』の書写年代は、その後の長和・寛仁の頃（1012～1020）と推定されている。したがって、この「仮名消息」は、それ以前の十一世紀初期のものであろう。「書風はおっとりとして素直な実用的書きぶりである。字体はよく簡略化し、その涼しい簡明さは、当時の仮名字体の発達の程が偲ばれて貴重である。」⁸と、飯島春敬は述べている。影印に見られる連綿は、長めの「し」の「かな（女手）」が特徴的で、縦に五～六文字あるいは十文字続く箇所も見られる等、既に連綿体としての流れが出来ている。尚、藤原公任については『紫式部日記』の寛弘五年（1008）十月十六日の記事に、公任すなわち「左衛門の督、『あなかしこ。此のわたり、我が紫やさぶらふ』⁹と、酔って御几帳の中を覗き込む場面が記されている。

十一世紀中頃あるいは後半の書と推定される『三宝感応要録』の紙背文書「傳藤原行成筆 仮名消息」（京都・鳩居堂蔵）は¹⁰卷子装で、消息十四通が含まれている。その内の一通が「傳藤原行成筆 仮名消息」（書芸文化院「春敬記念書道文庫」蔵）である。

これを飯島春敬は「墨つきに愛敬があり、なまめかしく書き流した様は、さながら源氏物語において取り交わした消息を見る心地がする。」¹¹と評している。拝見した「傳藤原行成筆 仮名消息」の華麗な連綿・墨継・構成をみせる「かな（女手）」消息に比べると、「北山抄紙背仮名消息」は書体・連綿等を含め、発達途上のものと言えよう。

更に、東京国立博物館蔵『「延喜式」紙背「延喜式卷第四紙背仮名消息」¹²が伝存し、これについて、

国宝「延喜式」紙背の仮名消息5通のうちの1通で、卷第四の紙背の第23紙と24紙にあたる。のびやかで流麗な連綿が数文字にわたって続き、柔らかい筆致の漢字と織り成す美しさは、まさに実用の美といえるであろう。一中略—この仮名消息は時代的に相前後する「高野切」などの調度手本とは異なり、おおらかにそしてあわただしく筆を運んでいる。その書風や前後の文書などから11世紀の書写と推定されている。このほか、「延喜式」からは、卷三十九の紙背には源兼行の書状が発見されている。¹³

と、島谷弘幸が述べる。その影印から受ける印象は、「おおらかにそしてあわただしく筆を運んでいる」即ち、実用的な走り書きの美をもつ消息といえよう。

なお、「高野切」とは、十一世紀中頃に書写され、伝存する最古の『古今和歌集』写本「傳紀貫之筆 高野切古今和歌集」である。この調度手本は伝存する古筆の中での最高峰とされ、紀貫之筆と伝えられているが、実際は三人の能書家の寄合書きである。その第二席として「傳紀貫之筆 高野切古今和歌集」第二種を書写し、「延喜式」卷三十九の紙背に発見された「書状」を書したのは源兼行（生年未詳～1019～1074～没年未詳）であると、小松茂美によって筆者確定されている。そして、源兼行筆の「書状」執筆時期は、長元九年（1036）四月と、小松茂美は推

⁶平安書道研究会編『日本名筆全集 第十六巻』、書藝文化院、1957年、p.31

⁷ 同上、図版

⁸飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、1975年、p.667

⁹萩谷朴著『紫式部日記全注釈 上巻』（全二冊）角川書店、1998年、p.458

¹⁰平安書道研究会編『日本名筆全集 第十六巻』、書藝文化院、1957年（?）、図版

¹¹飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、1975年、p.672

¹²平安書道研究会編『日本名筆全集 第十六巻』、書藝文化院、1957年（?）、図版

¹³ 島谷弘幸著「書之美 延喜式卷第四紙背仮名消息」（『毎日新聞 日曜くらぶ』、2010年8月29日、p.2）

定している。¹⁴ 又、この源兼行の父は、『紫式部日記』寛弘五年（1008）十一月十七日の記事に、能書家として藤原行成と共に名が挙げられている源延幹である。

そして、堀江知彦は「女手の美は古筆切によって十分に鑑賞できるが、それはいわばよそゆきの姿が多い。こうした一群の仮名消息によって日用の体を知ることができるのは、仮名書道研究の上に大きい利益である」¹⁵と言う。これらの「仮名消息」は、「かな（女手）」が創られ発展してゆく姿を考える上での貴重な資料であり、「傳紀貫之筆 自家集切」以降、十一世紀中頃迄、「かな（女手）」書の古筆が伝存しない間の「かな（女手）」の流れを推察する手掛りである。又、「梅枝」巻で物語られる、或は紫式部時代の「かな（女手）」消息を推察する貴重な資料である。

2. 『源氏物語』時代の手紙について

平安時代、男女間あるいは女同志で取り交わす「かな（女手）」で書かれた手紙を、消息および文（ふみ）という。男性の間で取り交わされる手紙は漢文体で書かれたものは尺牘、和様化された漢文で書かれたものを書翰または書状という。従って、「かな（女手）」で書かれた「北山抄紙背仮名消息」二通は、藤原公任が女性から貰った消息であろう。なお、「傳藤原行成筆 仮名消息」の筆者は不明である。

「消息」という言葉は、挨拶・案内・お伺いの意味もあり、口頭で直接または人伝に交わされる意思伝達即ちコミュニケーションの手段である。そして、コミュニケーションとは、

われわれの生活のもっとも重要な側面の1つである。一中略—われわれのコミュニケーションに主要な役割を果たすという意味において、ことば・言語は人間独自のものである。一中略—言語はコミュニケーションにとってきわめて重要である。人は、使用することばの選択、そのことばの

使用方法を非常に大切だと考える。¹⁶

この言語形態のコミュニケーションには、会話のみならず手紙など文字の使用も含まれる。したがって、言葉による消息を、「かな（女手）」を得た人々が文字化したのが消息・文（ふみ）であると言えよう。「ふみ（文）」も、「ふつうの手紙以外に、『恋文の意味』でも使われる—中略—恋文はふつう和歌の形式をとる。貰った歌に対する返事を「返し（歌）」という」¹⁷コミュニケーションの手段である。

玉上琢彌は『源氏物語』のすべては、女房の語り口である。かつて生きた光る源氏と紫の上のそば近く仕えた女房が、生き残って『問わず語り（蓬生の巻末参照）』するのを、若い女房が筆記し編集したのが『源氏物語』である、というたてまえである。¹⁸と、述べている。口頭で伝達される会話は言語形態のコミュニケーションの根幹をなすものであるが、文字は会話の内容や情報を異なる場所の人に、さらに時代を超えて伝えることさえ可能とする。十一世紀初頭、紫式部が執筆した『源氏物語』を現在に伝えるのも「かな（女手）」文字による書記である。

尾崎左永子は、貴族社会における男女間の手紙（消息・ふみ）の贈答の事情を、次のように述べている。

当時、身分の高い女性は、他人に顔を見せることはほとんどありません。一中略—姫君のまわりには乳母や多くの女房たち、女童が仕えていて、物と人とで十重二十重に守られていたわけで、男は女を直接見ることがなかなかできない仕かけになっていました—一中略—男はこれと見込んだ女に対して、まず「文を通わせ」ます。一中略—手紙は当然、男にとっても女にとっても、教養と才知を推測する手だてとなります。そのために、あらゆる文化の粋がここにこめられました。¹⁹

そして、尾崎は、手紙が、まだ見ぬ相手を「男にと

¹⁴ 小松茂美著『平等院鳳凰堂色紙形の研究』、中央公論美術出版、1973年

¹⁵ 平安書道研究会編『日本名筆全集 第十六巻』、書藝文化院、1957年、p.33

¹⁶ D. マツモト著、南雅彦・佐藤公代監訳『文化と心理学—比較心理学入門—』、北大路書房、2004年、p.164

¹⁷ 金田一春彦監修『完訳用例古語辞典』、学研、1998年、p.851

¹⁸ 玉上琢彌訳注『源氏物語 第一巻』（全十冊）角川書店、1974年、p.13

¹⁹ 尾崎左永子『源氏の恋文』、求龍堂、1997年、p.13～14

っても女にとっても、教養と才知を推測する手だてとなります。」、そして、手紙という言語形態のコミュニケーションに、当時の貴族文化の粋が込められたものであることに言及している。

その背景には、日本の政治と文化の面からみれば、寛平六年（894）遣唐使が停止され、すでに自家薬籠中のものとしていた中国文化を基礎として日本独自の文化が勃興し、時を同じくして始まった藤原氏の閥閥政治体制を維持するため、后・女御等として出仕した藤原氏の女性達を中心とした後宮サロンとでも言うべき文化が興っていたことが挙げられる。そして、『源氏物語』が執筆された十一世紀初頭は、まさに、後宮サロン文化の絶頂期であり、政権を握った貴族達が華麗で高貴な「雅び」と呼ぶべき貴族文化を謳歌していた時代である。

また、すでに「かな（女手）」文字が完成されていた時期であり、手紙を書く紙は舶来の唐紙のみならず、嵯峨天皇の大同年間（809～810）に設けられた紙屋院で漉かれた紙を始めとする国産の紙が存在し、手紙が書かれる状況が整っていたのである。その上、当時、貴重であった紙を自由に使えるほど、貴族社会は充実していたという。その結果として、手紙（消息・ふみ）を始めとする、文字化された言語形態のコミュニケーションが花開いたと言えよう。

その手紙を始めとする雅びな文化の中心となるのは、日本の四季が感じさせる時の移ろい、仏教が齎した無情観である。それを表現する和歌は、日常生活に深く浸透していたといわれ、会話一つとっても、『源氏物語』の中で見られるように、『古今和歌集』を始めとする和歌集等の教養が不可欠であった。

「梅枝」巻のような短い巻でも、和歌や会話の中に『古今和歌集』の和歌が引用され、コミュニケーションとしての和歌および会話の内容を拡張、教養や才知を示している例が、次のように四例見られる。①源氏「『これ分かせたまへ。誰にか見せん』と聞えたまひて、」²⁰は、巻一・春上・三八・紀友則「君ならで誰にか見せむ梅の花色をもかをもしる人ぞしる」から、引用。

②蛭兵部卿の「『うぐひすのこゑにやいとどあくがれん心しめつる花のあたりに 千代も経ぬべし』と聞こえ給へば、」²¹は、巻二・春下・九六・素性法師「いつまでか野辺に心のあくがれむ花しちらずは千世もへぬべし」から、引用。

③夕霧すなわち「一前略一宰相の君は聞きたまへど、しばしつらかりし御心をうしと思へば、つれなくもてなししづめて、さすがに外さまの心はつくべくもおぼえず。心づから戯れにくきをり多かれど、あさみどり聞こえごちし御乳母どもに、納言に上りて見えんの御心深かるべし。」²²は、巻十九・俳諧歌・一〇二五・よみ人しらず「ありぬやと心みがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞこひしき」から、引用。

④夕霧からの手紙を見た雲井雁が「『誰がまことをか』と思ひながら、世馴れたる人こそ、あながちに人のところをも疑ふなれ、あはれと見たまふふし多かり。」²³は、巻十四・恋四・七一三・よみ人しらず「いつはりと思ふものから今さらにたがまことをか我はたのまむ」から、引用。

貴族階級の女子教育においては、『枕草子』「清涼殿の丑寅の角の」段（正暦五年（994））で、中宮定子（976～1000）が語られた、詩歌管絃のみならず、あらゆる学芸の優れた指導者であった村上天皇（在位 946～967）の御代の宣耀殿の女御（芳子）が、まだ、姫君であったときの話が有名である。

芳子の父・藤原師尹は、日課として「一つには、御手をならひたまへ。次には、琴の御ことを、ひとよりことに弾きまさらむとおぼせ。さては、古今の歌廿巻を、みなうかべさせたまふを、御学問にはせさせたまへ」²⁴と教育し、後、女御として入内した芳子は、村上天皇の『古今和歌集』の試験に、めでたく合格した。これを中宮定子は「すきずきしう、あはれなることなり」²⁵と感動され、一条天皇（在位 986～1011）すなわち「主上もきこしめし、めでさせたまふ」²⁶と、感心なさったのである。

²¹ 同上、p.403

²² 同上、p.415

²³ 同上、p.418

²⁴ 萩谷朴校注『枕草子 上』（新潮日本古典集成（第11回））新潮社、1975年、p.58

²⁵ 同上、p.60

²⁶ 同上、p.60

²⁰ 阿部秋生・他校注訳『源氏物語 三』（日本古典文学全集14）小学館、1989年、p.400

この逸話は、女子の和歌教育の中心が『古今和歌集』であったことを示している。その為『古今和歌集』写本が求められ、結果として、伝存する調度手本の中で『古今和歌集』が際だって多いのも頷ける。

十一世紀初頭においては、貴族階級の少女が身に付けなければならない教養は第一に手習い、すなわち、「かな（女手）」書を習うこと、第二に琴・琵琶等の管絃、第三は和歌であった。中流貴族出身の紫式部も、当然の教養として「まず書と和歌である。和歌は拔群というほどでもないが一応一流の歌詠みであった。一中略一書のほうは遺品がないのでよくわからないが、鋭い的確な批評眼をもっているから、相当によく書いたのではあるまいか。絵や音楽の造詣もあったのだろうが、なかでも得意としたのは箏（十三絃）であったようだ。」²⁷と、述べられている。

さらに、文章生出身の詩人であり歌人の藤原為時を父に持つ紫式部は、当時の女性としては異例の漢学の才もあった。寛弘六年（1009）の『紫式部日記』には、一条天皇すなわち「内裏の上の、源氏の物語、人によませ給ひつつ聞こしめしけるに、『この人は、日本紀をこそよみたるべけれ。まことに才あるべし』とのたまわせるを、一後略」²⁸と、漢学の才が「源氏の物語」の裏付けとなっていることを評価する。

漢学の才は、貴族の男性が第一に身に付けなければならないものである。しかし、男性もまた、「音楽・書道・和歌など、すべての芸術に堪能であることが当時の貴族男性の理想像であった。」²⁹と、小松茂美は、藤原師輔（908～960）の『九条殿遺誡』などを例に挙げ、述べている。書・和歌・管絃は、当時の貴族階級の必要不可欠な教養であった。そして、女性が使用できる文字「かな（女手）」は男女間のコミュニケーションの為に男性も不可欠な教養であった。

『源氏物語』が執筆された十一世紀初頭は、前述したように、閥閥政治体制のもと、後宮サロン文化の絶頂期である。当時の宮中は、宮仕えに出た紫式部が経験したような権力争いの世界である。紫式部

の仕えた一条天皇の中宮彰子（988～1074）は、藤原氏最盛期の氏長者である父・藤原道長（966～1027）の権勢を持続させる為には、競争者達に勝ち、次期天皇となる皇子を儲けなければならない。里方の権勢や財力は無しのこと、究極の武器となったのは高い教養と才知が滲みでる人柄であろう。その権力争いの渦中にいる高貴な女性達を支えたのは、藤原道長の信任が厚かった紫式部のような、書・和歌・管絃等の教養を身につけた中流貴族出身の女性達であったと言えよう。

『源氏物語』では、所々で、絵画を始めとする芸術論が物語られている。これは、紫式部が自らの教養を誇示するというより、教養のある読者の嗜好にあわせるだけではなく、知識を必要とする読者に対しての教養として物語ったのではないであろうか。紫式部の周辺は、中宮彰子、そして共に彰子に仕える高い教養を持つ歌人の赤染衛門・和泉式部・伊勢大輔など、また、皇后定子、そして定子に仕える歌人であり『枕草子』の作者・清少納言などの女房達、すなわち、錚々たる読者の存在があった。そして、『源氏物語』を楽しむだけではなく、教養書として享受する多くの読者も存在したと思われる。

貴族階級の女性達が教養の第一として学ぶのは、手習い即ち「かな（女手）」書を習うことである。従って、「梅枝」巻で「かな（女手）」についての書論が物語られ、それを当時の知識を求める貴族階級の女性達が書の教養書として享受したのも頷ける。

3. 「梅枝」巻の書論について

作者・紫式部は、「梅枝」巻では、古いもののほうが良質という尚古趣味を述べているにもかかわらず、「かな（女手）」の書に関しては、「よろづの事、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。古き跡は、定まれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなんありける。妙にをかしきことは、外よりてこそ書き出づる人々ありけれど」³⁰と、「かな（女手）」が最も優れていると賞讃し、昔の人の筆

²⁷阿部秋生・他校注訳『源氏物語 一』（日本古典文学全集 14）小学館、1989年、p.36

²⁸萩谷朴著『紫式部日記全注釈 下巻』（全二冊）角川書店、1995年、p.294

²⁹小松茂美著『古筆』、講談社、1972年、p.12～13

³⁰阿部秋生・他校注訳『源氏物語 三』（日本古典文学全集 14）小学館、1989年、p.407

跡については、型が決まっていることは評価するが、ゆったりとした風情が十分になく一様に似通っている、すなわち、個性的ではないと源氏に評させている。これは、『源氏物語』に設定された時代ではなく、紫式部自身の時代の書評と思われる。

紫式部のいう「古きあと」とは、前述した「傳紀貫之筆 自家集切」、或は「石山寺蔵虚空菩薩念誦次第紙背文書」の「仮名消息」第二種の天地を揃えた書式の「かな（女手）」書、そして、「今の世」の「かな（女手）」書は「傳藤原行成筆 仮名消息」、或は後述する「傳紀貫之筆 高野切古今和歌集」第一種のような「かな（女手）」書ではないであろうか。そして、「よろずの事、昔にはおとりざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。」と述べているのは、藤原道長の信任が厚く、平安時代中期を代表する能書家であり和様書道の大成者である藤原行成（972～1027）の存在があったからと考えられる。

『紫式部日記』の寛弘五年（1008）十一月十七日の記事には、藤原道長の長女・彰子が新皇子・敦成親王を抱いて内裏に還啓された翌朝に、道長の御贈り物を御覧になる様子が、次のように記されている。

夜べの御贈り物、今朝どこまかに御覧ずる。御櫛の筥のうちの具ども、いひつくし見やらむかたもなし。手筥一双、片つかたには、白き色紙造りたる御冊子ども、古今・後撰集・拾遺抄、その部どものは五帖につくりつつ、侍従の中納言と延幹と、おのおの冊子ひとつに四巻をあてつつ、書かせ給へり。表紙は羅、紐おなじ唐の組、懸子の上にいたり。下には、能宣・元輔やうの、古今の歌よみどもの、家家の集書きたり。延幹と侍従の君と書きたるはさる物にて、これは、ただ気ぢかうもてつかわせ給ふべき、見しらぬものどもにしなさせ給へる、今めかしうさまことなり。³¹

そして、記事の中の「侍従の中納言」即ち藤原行成と「延幹」即ち源延幹は、この時代を代表する能書

家である。この二人が『古今和歌集』、『後撰集』、『拾遺抄』等を書写しているのである。これらは、高貴な女性の教養に欠かせない書と和歌の手本、即ち調度手本である。その他、「今めかしうさまことなり」と評している、無名の能書家に書かせた私家集も入れられている。これらの記述は、当時の有様や『源氏物語』の背景を伝えてくれる貴重な資料である。

藤原行成の書について、名古屋明は、次のように、

細い線で華麗な書風も表現しており、和様の典型とされる。つまり、十一世紀中期には和様が完成し、漢字では藤原行成の書風が習うべきもっとも美しい和様として、行成の子孫を軸にその後の基盤となって広まった。和様の書美は、すべて行成の書からはじまっていると言えるほど流行したのである³²

と評し、そして、飯島春敬は次のように述べている。

その書風も、新味があつて暖かく艶があり、後の和様漢字に較べると、さすがに気宇は大きいものである。道風・佐理と共に三蹟に数えられ、権蹟と称す。真筆には白楽天詩巻等の漢字のみが伝わり、仮名においてはその真と確認されるものがない。³³

藤原行成の「かな（女手）」の真筆は伝存しないが、父・行成の書風を受け継いだと言われる藤原行経（1012～1050）が筆者であると、久曾神昇が確定した³⁴「傳紀貫之筆 高野切古今和歌集」第一種等からは、行成の「かな（女手）」の書美が窺われる。なお、十一世紀中頃の『古今和歌集』写本である「傳紀貫之筆 高野切古今和歌集」第一種の優雅典麗な「かな（女手）」の書は、古筆中の最高峰と賞される「傳紀貫之筆 高野切古今和歌集」三種中でも、最も高貴な書美を持つと評され、そして、藤原行成の「細

³¹ 萩谷朴著『紫式部日記全注釈 下巻』（全二冊）角川書店、1995年、p.34

³² 「第六〇回毎日書道展特別展示『春敬の眼』 - 珠玉の飯島春敬コレクション -」、毎日新聞社・（財）毎日書道会、2008年、p.11

³³ 飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、1975年、p.667

³⁴ 久曾神昇著「仮名古筆（二一）」（古典研究会編『汲古』第30号、汲古書院、1996年、p.7）

い線で華麗な書風も表現しており、和様の典型とされる「漢字からは、子・行経と同様、或は行経以上の「かな（女手）」の書を書いた可能性があることが窺われる。行成の「かな（女手）」を見る機会があったからこそ、紫式部は「仮名のみなむ今の世はいと際なくなりたる。」と、源氏に述べさせたのであろう。

行成の時代、既に「かな（女手）」の美は完成され、伝存はしないが『紫式部日記』に見られるような能書家達による調度手本も存在したと思われる。その調度手本を貴族階級、とくに女性達が教養の第一として手習いし、私的な手紙（消息・ふみ）を書く基礎を作り、個々の人柄をあらわす個性的なメッセージに昇ったのではないであろうか。それを示すのが、僅かな例ではあるが、前述した「北山抄紙背仮名消息」及び「傳藤原行成筆 仮名消息」等といえよう。

手紙について、尾崎左永子は次のように述べる。

いいたいことは主として「歌」によって伝えられます。『源氏物語』は歌物語としての性格を色濃くもっていますから、歌をはずしては物語が成り立たない面がありますが、同様に、歌を中心とする手紙もまた、『源氏物語』をささえる大きな要素であることはいうまでもありません。³⁵

『源氏物語』にみるかぎりでは、手紙の文体の「様式」は、中心に和歌があり、前後に短いことが添えられる、という形がふつうです。和歌だけがとりかわされることももちろんあったわけですが、一般的な形式としては、文章と和歌とがないまぜになり、和歌に盛りきれなかった内容を、短く書き添える形が多く見られます。³⁶

したがって、様々な手紙の中から、源氏が手本としたのも和歌を中心とし、時宜に適った「かな（女手）」で書かれた私的な手紙（消息・ふみ）であろう。

源氏は「女手を心に入れて習ひしさに、こともなき手本多く集へたりし中に、中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一行ばかり、わざとならぬをえて、際ことにおぼえしはや。」³⁷と、六

条御息所の手紙を賞讃する。「走り書き」即ち連綿体の流れるような美しい筆勢の個性的な書体の手紙と思われる。六条御息所の人柄は「心深うおはせしかば」³⁸、即ち、物事を深く考えられる方でいらっしやった、と述べる。六条御息所の娘・秋好中宮の筆跡は「宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどや後れたらん」³⁹と、繊細で優美な趣であるが、才気の点で母君に及ばないと比較するが、作者は、中宮という身分にも関わらず、明石の姫君の裳着の腰結役を快く受けた聡明さや人柄の良さにも言及する。

亡き藤壺の宮については「故入道の宮の御手は、いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひぞ少なかりし。」⁴⁰と述べ、深みがあり品よく美しいが、筆力に可弱いところがあり余韻が足りないと、宮の人柄をも含め評している。

そして、源氏は「院の内侍こそ、今の世の上手におはすれど、あまりそばれて癖ぞ添ひためる。さはありとも、かの君と、前斎院と、ここにとこそは書きたまはめ」⁴¹と、朧月夜内侍（かの君）、朝顔の姫君（前斎院）、そして、紫の上（ここ）の三人を、書の上手と認められている。朧月夜内侍の筆跡は「今の世の上手におはすれど、あまりそばれて癖ぞ添ひためる。」、すなわち、新しい感覚美をもつ個性的な達筆であると、人柄を髣髴とさせる批評をしている。

朝顔の姫君については、「梅枝」巻の手紙では「ほのかなる」すなわち薄墨で幽かな線を用い余韻のある書としか述べられていないが、「賢木」巻では「御手こまやかにはあらねど、らうらうじう」⁴²と繊細な美しさではないが才気を感じさせる筆跡、「朝顔」巻では「青鈍の紙のなよびかなる、墨つきはしも、をかしく見ゆめり。」⁴³と優美な書風と評し、「何のをかしき節もなきを、いかなるにか、おき難く御覧ずめり。」⁴⁴の手紙と述べる。手放し難いと思わせる

小学館、1989年、p.407

³⁸ 同上、p.408

³⁹ 同上、p.408

⁴⁰ 同上、p.408

⁴¹ 同上、p.408

⁴² 阿部秋生・他校注訳『源氏物語 二』（日本古典文学全集 14）小学館、1989年、p.112

⁴³ 阿部秋生・他校注訳『源氏物語 二』（日本古典文学全集 13）小学館、1989年、p.467

⁴⁴ 同上、p.466～467

³⁵ 尾崎左永子『源氏の恋文』、求龍堂、1997年、p.11

³⁶ 同上、p.146

³⁷ 阿部秋生・他校注訳『源氏物語 三』（日本古典文学全集 14）

ほど、人柄の魅力が滲む筆跡なのであろう。

そして、「この数にはまばゆくや」と謙遜する紫の上には「いたうな過し給ひそ。にこやかなる方のなつかしさは、ことなるものを。」⁴⁵と評している。これは、源氏が理想の女性に育てた紫の上の優しく穏やかで美しい人柄を表わす書風の表現と考えられる。

尾崎左永子は「かな（女手）」で書かれた男女間の「ふみ（恋文）」について、次のように述べる。

手紙は当然、男にとっても女にとっても教養と才智を推測する手だてになります。そのために、あらゆる文化の粋がここにこめられました。たとえば紙の選び方からはじまって、その紙の色合い、たきしめた香り、墨つき、和歌の巧拙、そして包み文や結び文など外装の形式から、文に添える折枝に趣向、返事のはやさの緩急にいたるまで、水ももらさぬ美意識の粋がはりめぐらされ、緊張とスリルに満ちた恋のかけひきがおこなわれるのです。⁴⁶

その貴族社会の文化の粋を凝らした手紙は、相手の教養と才知を推測する手だてのみならず、手紙を送る人の教養と才知を示すという二面性をも持つものである。『源氏物語』時代の恋文だけではなく、筆墨を用いての書は、現代でも、筆者の人柄を如実に伝える。それ故に、紫式部は「心深うおはせしかば」と評した高貴な六条御息所の人柄を表わす筆跡、そして、朧月夜内侍、朝顔の姫君（前斎院）、紫の上の高貴で個性を示す三人の筆跡を上手としている。これは、高貴で个性的な人柄を表わす筆跡こそ、入内し権勢争いや栄華の只中に身を置く姫君の手紙（消息・ふみ）の手本として、教養と才知を示すための理想的な書風であると述べていると言えよう。

4. 「梅枝」巻の調度手本について

「梅枝」巻は、明石の姫君の裳着、それに続く入内の準備に忙しい六条院の様子を物語る。そして、

御調度どもも、もとあるよりもとのへて、御みずからも、物の下形 絵様などをも御覧じ入れつつ、すぐれたる道々の上手どもを召し集めて、こまかに磨きととのへさせたまふ。草子の箱に入るべき草子どもの、やがて本にもしたまふべきを選らせたまふ。いにしえの上なき際の御手どもの、世に名を残したまへるたぐひのも、いと多くさぶらふ。⁴⁷

と、源氏自ら、父親らしく、姫君の習字の手本とすべき古今の優れた調度手本を整える様子を描く。

そして、さらに、多様な人々に調度手本執筆を依頼する様子が物語られて行く。「まだ書かぬ草子ども作り加えて、表紙紐などいみじうせさせたまふ。」⁴⁸と、白紙のままの冊子等を準備し、「兵部卿宮、左衛門督などにもものせん。自ら一具は書くべし。」⁴⁹と、兵部卿宮及び「梅枝」巻にだけ現れる左衛門督に執筆依頼をし、源氏自身も書くこと述べる。女君の方々には「墨筆ならびなく選り出でて、例の所どころに、ただならぬ御消息あれば、人々難きことに思して、返さひ申したまふもあれば、まめやかに聞えたまふ。」⁵⁰と、丁寧に執筆依頼をする。

若い風流人達には「高麗の紙の薄様だちたるが、せめてなまめかしきを、『この物好みする若き人々ところみむ』とて、宰相中将、式部卿宮の兵衛督、内の大殿の頭中将などに、『葦手歌繪を、思ひ思ひに書け』とのたまへば、皆心々にいどむべかめり。」⁵¹と、高麗渡りの薄様めいた紙というところから、滑らかで艶のある薄様の斐紙と思われる紙に、洒落心のある「葦手歌繪」で書くように依頼している。そして、源氏自らも明石の姫君のために調度手本作りに勤しむ様子が、次のように物語られている。

古き言どもなど思ひすましたまひて、御心のゆくかぎり、草のもただのもの、女手も、いみじう書きつくしたまふ。一中略一女房二三人ばかり、墨

⁴⁷同上、p.406～407

⁴⁸ 同上、p.408～409

⁴⁹ 同上、p.409

⁵⁰同上、p.409

⁵¹同上、p.409

⁴⁵阿部秋生・他校注訳『源氏物語 三』（日本古典文学全集 14）小学館、1989年、p.467

⁴⁶尾崎左永子『源氏の恋文』、求龍道、1997年、p.13～14

などすらせ給ひて、ゆゑある古き集の歌など、いかにぞやなど選り出でたまふに、口惜しからぬかぎり侍ふ。一中略一脇息の上に草子うちおき、端近くうち乱れて、筆のしりくはえて、思ひめぐらしたまへる様、飽く世なくめでたし。白き赤きなど、掲焉なる枚は、筆とり直し、用意したまへるさまさへ、見知らむ人はげにめでぬべき御ありさまなり。⁵²

源氏は、古歌や由緒ある古歌集の歌などを選び、色々の紙を混ぜて綴じた草子（冊子）の、殊に赤や白など目立つ紙面には、「かな（女手）」の線質のみならず、墨色や墨量に注意を払って書いているのである。

この冊子は、赤や白の紙を混ぜて作られ、「高麗の紙の薄様だちたる」との断り書きがないことから、紙屋院で作られた国産の斐紙と考えられる。そして、

斐紙に染色しますと、実に冴え冴えとして発色が美しい。玉のような肌と光沢、滑らかな筆触、これがいたく王朝貴族の心を魅き付けました。平安後期の書籍や装飾経でもっとも豊富な遺例があるのが、この斐紙の染紙です。まさに平安王朝の時代美といって過言ではありません。⁵³

と、飯島太千雄は述べている。伝存する十一世紀中頃以降の古筆「傳藤原行成筆 関戸本古今和歌集」を始めとする多くの調度手本の料紙には、斐紙の染紙が用いられているのが見られる。

明石の姫君への調度手本である為、主に「かな（女手）」中心に書かれたと思われるが、「御心のゆくかぎり、草のもただのも、女手も、いみじう書きつくしたまふ。」とある。「草」は草仮名である。すでに、「かな（女手）」が主流となった十一世紀中頃においても、草仮名は、筆者を藤原公経（生年未詳～1051～1099）と九曾神昇・飯島春敬らが推定している⁵⁴「傳紀貫之筆 高野切古今和歌集」第三種の巻十九・旋

頭歌・1007番歌と返しの1008番歌に使われている例等が見られる。そして、「ただのも」は、晴の調度手本の執筆である以上くありきたりの「かな（女手）」>とは解釈できない。これについての定説はないという。

兵部卿宮が持参された調度手本について作者は、

やがて御覧ずれば、すぐれてしもあらぬ御手を、ただ片かどに、いといたう筆すみたるけしきありて、書きなしたまへり。歌もことさらめき、側みたる古言どもを選りて、ただ三行ばかりに、文字少なに好ましくぞ書きたまへる。大臣御覧じ驚きぬ。「かうまでは思ひたまへずこそありつれ。さらに筆投げ棄てつべしや」と、ねたがりたまふ。⁵⁵

と、物語る。兵部卿宮は少し変わった古歌を選び、とくに優れているとは言えないが、大層上品で垢ぬけた感じの筆致で、和歌一首を三行に書かれている。漢字を少なくし、「かな（女手）」を多く書かれているのは、明石の姫君への配慮であろう。「すぐれてしもあらぬ御手」と述べているにも関わらず、源氏を「かうまでは思ひ給へずこそありつれ。さらに筆投げ捨てつべしや」と驚かせ、褒めさせている。これは、「いといたう筆澄みたるけしきありて」と述べられている兵部卿宮の高貴な人柄を表わす筆跡こそ、姫君教育に相応しいとの、作者の考えであろう。

そして、あまりに見事な源氏の調度手本以外には、兵部卿宮が見向きもされない御様子が、次のように物語られている。

唐の紙のいとすくみたるに、草かきたまへる、すぐれてめでたしと見たまふに、高麗の紙の、膚こまかに和うなつかしきが、色などは華やかならで、なまめきたるに、おほどかなる女手の、うるはしう心とどめて書きたまへる、たとふべき方なし。見たまふ人の涙さへ水莖に流れそふ心地して、飽く世あるまじきに、またこの紙屋の色紙の、色あひ華やかなるに、乱れたる草の歌を、筆に任

⁵²阿部秋生・他校注訳『源氏物語 三』（日本古典文学全集 14）小学館、1989年、p.409～410

⁵³ 飯島太千雄著『王朝の紙』、毎日新聞社、1994年、p.183

⁵⁴飯島稲太郎編『特別精印本 傳紀貫之筆 高野切第三種』、書芸文化新社、1996年

⁵⁵阿部秋生・他校注訳『源氏物語 三』（日本古典文学全集 14）小学館、1989年、p.411

せて乱れ書きたまへる、見どころかぎりなし。しどろもどろに愛敬づき、見まほしければ、さらに残りどもに目も見やりたまはず。⁵⁶

作者が「唐の紙のいとすくみたる」と述べる「唐の紙」は、北宋彩牋すなわち鮮烈な色彩の具引雲母刷紙であろうか。源氏はこの紙に負けない草仮名を用い、際立って立派に書かれている。この北宋彩牋について、飯島太千雄は次のように述べる。

筆者が推定できる平安時代後期の確実な彩牋を継いでゆきますと、十一世紀末までの彩牋の中心は、北宋製です。『本能寺切』は、行成の晩年の作ですから十一世紀初めです。つまり、この十一世紀の百年は、北宋彩牋の全盛時代といえるわけです。それはどんな紙かといいますと、一般に『唐紙』と呼ぶ具引雲母刷紙で、ままたま箋がこれに加わります。⁵⁷

この唐紙は、十一世紀初期の和様漢字で書かれた「藤原行成筆 本能寺切」のみならず、十一世紀中期の調度手本「傳藤原行成筆 近衛本和漢朗詠集」、「傳源俊賴筆 卷子本古今和歌集」等の料紙である。

紫式部は、「膚こまかに和うなつかしき」という、高麗渡り薄様の斐紙と思われる紙には、おっとりとした「かな(女手)」で端正に書かれているのが譬えようもなく素晴らしいと述べ、更に、平安時代の京都紙屋院で漉かれた厚様の斐紙と思われる華やかな色彩の紙には、自由奔放な草仮名で書いた歌を、紙に相応しく散らし書きしているのは、この上もないと物語る。これらの調度手本についての記述は、最も相応しく映え合う紙と文字の取り合わせについて述べていると思われる。これも、手紙(消息・ふみ)を書くに際し、書く人の人柄を印象づけるものであり、当時、求められていた教養の一つであろう。

源氏が依頼された女君の方々の調度手本は取り出されないが、若い方々に依頼されたのは、宰相中将(夕霧)のもののみ物語られ、「水の勢ゆたかに書き

なし、そそけたる葦の生ひざまなど、難波の浦に通ひて、こなたかなたいき交じりて、いたう澄みたる所あり。」⁵⁸と葦手書きについて述べる。即ち、兵部卿宮の書と同じく「いたうすみたる所あり」と、すっきりと上品であると評し、男性では、源氏は言うまでもなく、兵部卿宮と宰相中将(夕霧)の書が高貴で上品な人柄が滲む書風と述べているのである。

これらの書風に相對するのが左衛門督の書である。「ことごとしうかしこげなる筋をのみ好みて書きたれど、筆のおきて澄まぬ心地して、いたはり加へたるけしきなり。歌なども、ことさらめきて、選り書きたり。」⁵⁹と、才走っているが垢ぬけない筆跡で、歌の選び方もわざとらしいと評し、左衛門督の軽薄な人柄が滲みでた書風を表わしている。源氏は兵部卿宮と左衛門督に対し「気色ばみいますかりとも」⁶⁰と尊敬語を使っているので、左衛門督も低い身分とは思えない。作者は身分に関わらず筆跡に人柄が表れると述べ、高貴な人柄が滲みでる上品な調度手本を源氏に求めさせているのであろう。

兵部卿宮が、明石の姫君の為に贈呈した「嵯峨帝の、古萬葉集を選び書かせたまへる四卷、延喜帝の、古今和歌集を、唐の浅縹の紙をつぎて、おなじ色の濃き紋の、綺の表紙、同じき玉の軸、綾のからくみの紐などなまめかしうて、巻ごとに御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる」⁶¹調度手本は、筆者・歌集ともに最高級のものである。特に、延喜帝の『古今和歌集』は巻毎に内容に合せ書風を変え、浅縹色の唐紙を引き立てるため調整され、源氏は「尽きせぬものかな。このごろの人は、ただかたそばを気色ばむにこそありけれ」⁶²と、賞讃する。「ふるき跡」でも、最高の物の魅力は不変との作者の考えを表わすと思われる。

さらに、兵部卿宮は「女子などを持て侍らましにだに、をさをさ見はやすまじきには、伝ふまじきを、まして朽ちぬべきを」⁶³と、調度手本は娘に伝える

⁵⁸阿部秋生・他校注訳『源氏物語 三』(日本古典文学全集 14)小学館、1989年、p.412~413

⁵⁹ 同上、p.412

⁶⁰ 同上、p.409

⁶¹ 同上、p.413

⁶² 同上、p.413

⁶³ 同上、p.414

⁵⁶ 同上、p.412

⁵⁷ 飯島太千雄著『王朝の紙』、毎日新聞社、1994年、p.168

べきものであると述べる。調度手本は、『源氏物語』及び『源氏物語』が執筆された時代において、女子教育の為の教養書なのである。源氏は返礼として、兵部卿官の御子息へ、男子に相応しく漢籍を贈った。

源氏は父親らしく明石の姫君の為に、「この御箱には、立ち下れるをばまぜたまはず。わざと人の程、品わかせたまひつつ、草子巻物皆かかせ奉りたまふ。」⁶⁴と、身分の低い人のものは排除し、能書家の程すなわち身分、そして、品（しな）即ち品格を吟味して書かせた優れた調度手本を準備なさっている。

そして、「御絵どもととのへさせたまふ中に、かの須磨の日記は、末にも伝へ知らさむと思せど、今すこし世をも思し知りなんに、と思し返して、まだ取り出でたまはず。」⁶⁵と、須磨の日記を入内前の明石の姫君が御覧になれば、実母（明石の君）の身分を知り気落ちなさることを恐れて見せられない。これも、一見、父親としての配慮とも見えるが、明石の姫君の裳着の儀では、「母君の、かかる折だにえ見たてまつらぬを、いみじと思へりしも、心苦しうて、参う上らせやせましと思せど、人のもの言をつつみて過ぐしたまひつ。」⁶⁶と、実母の身分の低さが姫君の傷になることを恐れていることと合せると、自らの権勢を維持する為に、娘を后として出仕させようとする政治家としての源氏の姿勢が垣間見える。

調度手本は、貴族階級の女子教育の為、あるいは入内する姫君に教養書として持参させる為に作られたと言えよう。調度手本から学び取った和歌の知識は、高貴な女性の教養を示すものとして、会話や手紙（消息・ふみ）に生かされたであろう。又、書の手本としての調度本からは「かな（女手）」を学ぶだけではなく、「かな（女手）」と料紙の映え合い、それを生かす装丁に至る調度手本全体にわたる美をも享受したと思われる。それは、手紙（消息・ふみ）に活用され、貴族社会の文化の粋を凝らしたコミュニケーションとして、相手の教養と才知を推測する手立てのみならず、手紙を送る人の高い教養と才知および人柄を示す為に役立てられたと考える。

源氏は、源氏自身及び兵部卿官と夕霧のような高

貴で上品な人柄が滲む書風の調度手本、そして、嵯峨帝及び延喜帝の最高の調度手本から、和歌や書の教養のみならず、明石の姫君が高貴な人柄を身につけることを望んだと思われる。その結果の一つとして、六条御息所はじめとする高貴で個性な女性達が書いたような、そして、受け取った相手に手放し難いと思わせる程の人柄の魅力が滲む手紙（消息・ふみ）を、明石の姫君が書くことを期待している。

源氏が、明石の姫君に期待をかける目的は、作者・紫式部が仕える中宮彰子の父・道長と同じく、源氏が権勢を維持する為に入内させた姫君が競争者達に勝ち、次期天皇となる皇子を儲けることであり、明石の姫君の究極の武器は、源氏の権勢や財力はもとより、高い教養が滲みでる姫君自身の人柄であることを示唆している。華麗で高貴な「雅び」と呼ばれる平安貴族文化を具現したともいえる調度手本は、紫式部が身を置く現実の世界同様、『源氏物語』の世界でも、権勢を維持する目的で入内させる姫君の教育という下準備の為に用意された道具の一つに過ぎなかったのである。紫式部は、常に現実の世界と『源氏物語』の世界を重ね合わせ、錯綜させて物語を書き記していたと思われる。その為、平安時代の読者達は、『源氏物語』の世界を身近なものとして楽しむだけではなく、教養書としても受容したのであろう。

おわりに

「梅枝」巻の書論を、かな書道家の視点で考察を試み、調度手本が、『源氏物語』及び『源氏物語』が執筆された時代において、どのような目的で作られたかを推量した。藤原氏の閥閥政治の隆盛に伴い、数多くの調度手本が作られたと思われるが、十一世紀中頃以降のもののみが伝存する。そして、武士が政権を取ると、貴族文化の一つである調度手本も衰退していった。現在、伝存する調度手本は、華麗で高貴な「雅び」と呼ばれる平安貴族文化を具現した貴重な文化遺産である。

参考文献

- ・新編国歌大観編集委員会編『新編国歌大観』、角川書店、1987年。
- ・飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、1975年。

⁶⁴同上、p.414

⁶⁵同上、p.414～415

⁶⁶同上、p.405

- ・平安書道研究会編『日本名筆全集』、書藝文化院.

(Received:September 30,2010)

(Issued in internet Edition:November 1,2010)